

## 小藤武門「日本ビクター激動の戦後を検証する」と私のビクター史

私はこの機に日本ビクターが如何なる会社だったかを考えるに有用な資料として、われらが先輩・小藤武門の一文「日本ビクター激動の戦後を検証する」をここに提出します。氏はラジオ時代に S 盤アワーを作った企画担当者として有名、その文章は実に見事で、私のビクターに対する次のような歴史観の原点として提示したいと思います。

その歴史観によるビクターとは次のような会社です。

- 1、ビクターの戦後には苦難の時代があった。給料遅配は度重なり、2度に及ぶ人員整理もあった。しかし当時のビクターの生き生きとした独特の気風をこの小藤の一文から想像できる。高柳健次郎はその苦難の最中昭和21年に入社している。徳光博文、渡辺叔夫、宍道一郎、垣木邦夫、井上敏也、鈴木健、高野鎮雄、らはその後の繁栄を生み出した経営者たちだが、共にこの独特の気風下で苦難の時代を乗り越えた面々である。
- 2、ビクターはこの苦難の中からステレオレコードと再生機を開発し「音のビクター」と言われる一時代を創った。この「ステレオ開発」並びに一つの到達点「生スリ実験」については「杉の会ホームページ」<http://www.suginokai.net/>に詳しく紹介されている。この時代のビクターのステレオ事業を学ぶため、松下幸之助は人を派遣し駐在させた話が、平田雅彦「松下幸之助と日本ビクター」に紹介されていて興味深い。(ビクター高柳会 HP・参考資料からアクセス可)
- 3、そしてビクターはテレビ時代を経てビデオの時代には VHS で世界制覇を成し遂げた。「VHS の世界制覇がいかに達成されたか」、この課題は時を経た今だからこそ正しく評価されることもあるが、合わせて今後の日本のためにも重要な意味を持っているようである。現在ビクターOB・柳義久氏は大学へ戻ってこの課題について鋭意研究中だが、この研究途上での興味深いエピソードなどは、当ビクター高柳会への投稿として依頼中であり期待してほしい。
- 4、そしてビクターは21世紀初頭に消滅した。  
トインビー「歴史の研究」によれば、世界を制覇して文明の域に達した全てが消滅するというから、日本ビクターの消滅もローマ帝国の消滅と同じく、単なる消滅ではなく次の時代に、各種、各様の復活・ルネッサンスがあるものと信じたい。

戦後の苦難から立ち上がったビクターの歴史には学ぶべきことが多々あり、その苦難の時代をまずは小藤武門の名文で読んでもらいたい。

以上 廣田 昭